

- 中教審答申について
- FDカンファレンス報告
- スタッフからひとこと

## 個人のやりがいをベースに中教審答申を再解釈する



### 答申の概要

中央教育審議会が、平成24年8月28日、『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』と題する答申を出しました。この答申の内容は同答申p.6の次の一文にまとめられます。

次代を担う若者にこのような能力を身に付けさせるには、学校制度全体を、従来からの組織や形式の観点からではなく、プログラム中心・具体的な成果中心の観点から見直すことが必要である。

ここでの「プログラム中心・具体的な成果中心の観点」は、「プログラムとしての学士課程教育」という概念でより具体的な形を取ります。その内容は、pp.23-4の「学士課程教育が学位授与の方針に基づいた体系的で組織的なプログラムであること」という言い方に端的に示されています。つまり、学位授与の方針で定めている知識・能力が、教育を通して卒業時に確実に身に付いているよう個々の授業が配置されている、プログラムとしてのカリキュラムとして学士課程教育を考えよう、ということです。これを次のように、さらにより具体的に言い換えることができます。

- ①カリキュラムの目的は学位授与の方針で定めた知識・能力を学生に身に付けさせることであり、
- ②個々の授業はその目的を分担して果たすために配置されているのであり、
- ③カリキュラムが機能しているかどうかは、カリキュラムの目的であるところの、学位授与の方針で定めた知識・能力を学生が身に付けて卒業しているかどうかで測られる

授業は教員のものであるのではなくカリキュラムのものである、という内容の②は、教員個人のレベルで重要です。③は、大学評価の観点を「成果中心」に改めるという点で組織にとって非常に重要です。しかしながら、②も③も、この答申で初めて出てきた論点であるわけではありません。

この答申での中心的な問題意識は、「日本の大学生の学修時間をどのようにして米国の大学生のレベルまで上げていくか」です。答申では、学修時間の改善が見られないのは、「プログラムとしての学士課程教育」という概念が定着していないからである、という方向で議論が進んでいきます(p.17)。学生が勉強しないのは、しっかり勉強しなくても大して困らない、ということを知っているからだと、というのがこの議論の出発点でなければならない

と私は考えますので、答申のロジックは妥当ではないと思いますが、それでも「プログラムとしての学士課程教育」という考え方自体は妥当で推進すべきものでしょう。

### 個々の教員として

「プログラムとしての学士課程教育」を推進するために、答申は大学に対して次を求めています(p.20)。

(ア) 学長を中心として、副学長・学長補佐、学部長及び専門的な支援スタッフ等がチームを構成し、当該大学の学位授与の方針の下で、学生に求められる能力をプログラムとしての学士課程教育を通じていかに育成するかを明示すること、プログラムの中で個々の授業科目が能力育成のどの部分を担うかの認識を担当教員間の議論を通じて共有し、他の授業科目と連携し関連し合いながら組織的な教育を展開すること、プログラム共通の考え方や尺度(アセスメント・ポリシー)に則った成果の評価、その結果を踏まえたプログラムの改善・進化という一連の改革サイクルが機能する全学的な教学マネジメントの確立を図る。

学長を中心とするチームは、学位授与の方針、教育課程の編成・実施の方針、学修の成果に係る評価等の基準について、改革サイクルの確立という観点から相互に関連付けた情報発信に努める。特に、成果の評価に当たっては、学修時間の把握といった学修行動調査やアセスメント・テスト(学修到達度調査)、ルーブリック、学修ポートフォリオ等、どのような具体的な測定手法を用いたかを併せて明確にする。

教育プログラムの策定においては、CAP制やナンバリング等を実際に機能させながら、教員が個々の授業科目の充実エネルギーを投入することを可能とするように授業科目の整理・統合と連携を図る。また、学位授与の方針に基づく組織的な教育への参画、貢献についての教員評価を行い、教員の教育力の向上・改善や処遇の決定、顕彰等に活用する。

私は、この文を最初に読んだとき、何を言っているのかが頭に入ってきませんでした。多くの教員にとってもそうではないでしょうか。それはなぜでしょう?一つには、「ルーブリック」や「ナンバリング」等、なじみの薄い用語が頻出する、ということがあるでしょう。しかし、

(ア)の理解を阻害しているより強い要因は、(ア)に(正確には、答申全体に)個々の教員の共感を呼ばなければ物事が進まない、という視点が全くない、というものであるように思われます。中教審にしてみれば、(ア)は「大学に求めること」を説明している箇所だから、ということになりましょう。そして、構成員によく分かるように説明するのは各大学の仕事である、ということでしょう。しかし、「プログラムとしての学士課程教育」の定着を課題としているのですから、最初から各大学の構成員によく分かるように書いた方がはるかに効率的であるはずで、つまり、最初から個々の構成員に語りかける、という発想がない、ということでしょう。

(ア)は、個々の教員に対して、「ここで言われていることは、自分ではどうにもならない性質のものだ。上の方の人たちが心配すべきことだ。」というように思わせるものではないでしょうか。そこでは、共感は得られていません。現場の構成員が「確かにそうだ」と共感して初めて物事が進むのではないのでしょうか。共感がなければ、例え何かを変えても、それは「形だけ変えた」に終わるということをおもわれたいと思います。答申が課題としている「学修時間の確保」については、すでに共感が得られているものと思われたいと思います。しかし「プログラムとしての学士課程教育」の方はそう簡単にはいかないでしょう。学位授与の方針で定めた知識・能力を卒業時に身に付けているかどうかでカリキュラムが評価される、という大学評価の方針転換は、特に共感を得にくいものがあるでしょう。

問題は、ではどうやって個々の構成員の共感を得ていくか、ということになります。答申が課題としている「学修時間の確保」については、すでに共感が得られているものと思われたいと思います。しかし「プログラムとしての学士課程教育」の方はそう簡単にはいかないでしょう。学位授与の方針で定めた知識・能力を卒業時に身に付けているかどうかでカリキュラムが評価される、という大学評価の方針転換は、特に共感を得にくいものがあるでしょう。

上で、答申には「個々の教員の共感を呼ばなければ物事が進まない、という視点が全くない」と指摘しました。答申には、個々の教員の無理解を非難しているということは透けて見えていますが、反対に、どうすれば個々の教員が「やりがい」を感じる事ができるかという視点はありま

せん。大学教育の課題がある時、その議論を個々の教員のやりがいに基盤を置いた形で進んでいくな、教員の受け取り方はずいぶん違うものになるのではないのでしょうか。ここで、「授業の中で受講生の成長を目撃する」ということが教育のやりがいにつながり、また教員本人の成長にもつながる、と仮定してみてください。その仮定の下ではこういう絵が描けます。

個々の授業が、学位授与の方針で定める知識・能力を分担する

⇒ 分担した知識・能力で受講生が学修することで成長する

受講生の成長を目撃することで教員がやりがいを実感し、自分の成長を実感することで受講生の学業面での満足度が高まる

『学修時間の確保』の達成されている

⇒ カリキュラム全体で、学位授与の方針で定める知識・能力の成長が見られる

⇒ 「カリキュラムは目的を達している」と評価される

もちろんこれは過度に単純化され過度に楽天的な見方ではあります。しかし、それでは答申のスタンスはどうでしょうか？この答申で言われていることは、多くのものが過去の答申にあった内容を踏襲したものです。それは、答申のスタンスではうまくいかない、ということの意味しているのではないのでしょうか。そういう状況にある今、

(イ)大学の課題に共感しそれを共有することで、その課題を構成員が自分のものとして受け止める

(ロ)構成員のやりがいを高めると意識の下での解決法を定め、合意する

という方向性は追及する値打ちが十分あるものと思われたいと思いますが、いかがでしょうか。(文責：加藤鉦三)



## 2012信州大学FDカンファレンスが開催されました

「2012年度信州大学FDカンファレンス」が9月24日(月)・25日(火)の1泊2日の日程で、筑北村の冠着荘にて行われました。本カンファレンスはFD研修と新任教員FD研修を併せ、今年度は「学生の学びを深める」というテーマで、学内10部局から、40名の先生方が参加されました。

今年度は北海道大学名誉教授であり大学教育学会会長の小笠原正明先生を講師にお迎えし、「大学の授業を知的体験の場とするために一理系・文系の壁を越えて」というテーマで講演していただきました。また、高等教育研究センターの教員が講師となり、「学習理論」、「科研費申請書の書き方」、「文部科学省が求める教育改善の意味」、「ICTを使った授業デザイン」、「課題のデザインのしかた」、「アサーション・トレーニング」をテーマとした分科会形式のFDを行い、参加者は各自の希望でコースを選択しました。

終了時のアンケートでは、「学部、学科に関係なく、学生や教育に対する課題・悩みを共有できたことはとても良い経験になった。」「いろいろな所属の先生方と同じテーマで議論できたことは大変刺激になった。」「私自身を振り返り、考える機会になりました。」「予想以上に有意義でした。」等の感想が寄せられました。



▲講演を行う小笠原正明先生



▲グループワークでのロールプレイの様子



▲最後のまとめでの発表の様子

### スタッフからひとこと

FDカンファレンスは、グループワーク中心だったため活発に意見交換を行うことができ、また普段話すことのない他学部の教員との交流の場にもなり、有意義なFDになったと思います。ご参加いただいた先生方、ありがとうございました。(学務課教務グループ 細川美佳)

